

## 知っておいて！遺伝性大腸がん

日本では1年間にがんと診断される人が、100万人近いと推定され、その中で年間5万人弱の人が、遺伝性のがんを発症している、と言われています。

遺伝性のがんには様々な種類があり、最も多いのは、「遺伝性乳がん・卵巣がん」です。

次に多いのが「遺伝性大腸がん」で、大腸がん全体の約5%を占めます。

### ☆遺伝性のがんの発生メカニズム

遺伝性のがんのほとんどは「がん抑制遺伝子」の異常によって起こることが分かってきました。「がん抑制遺伝子」は、細胞ががんになるのを防ぐブレーキの働きをもち、通常は父方と母方から1つずつ受け継ぎます。ところが、遺伝性のがんに罹る人は、生まれつき1つの遺伝子に変異が起きていることが分かります。但し、1つでも「がん抑制遺伝子」が働いていれば、がんになるのを防げますが、環境要因(紫外線、食べ物、喫煙など)によって、もう1つの遺伝子にも変異が起きてしまうと、「がん抑制遺伝子」が働かず、がんになってしまいます。

変異した遺伝子を受け継ぐと、がんを発症する確率は高く、遺伝性乳がん・卵巣がん症候群は約60〜85%、家族性大腸腺腫症はほぼ100%、リーチ症候群は男性で54〜74%、女性で30〜54%の発症率です。

### ☆遺伝性大腸がんとは

代表的な遺伝性大腸がんは次の2つです。

#### ①家族性大腸腺腫症

20〜50歳の若い年齢で発症するの  
が特徴です。大腸の中に100以上も  
ポリープができ、ポリープを放置する  
と、ほぼ100%の確率でがんになり  
ます。また、がんは発症していなく  
も、家族性大腸腺腫症の遺伝子を受け  
継いでいる場合には、10歳代後半の年  
代から定期的に大腸内視鏡検査を受  
けておくべきです。ポリープがたくさ  
んできて、家族性大腸腺腫症と診断  
がつけば、その時点で予防的に大腸全  
摘手術が行われることがあります。が、  
その有効性は確認されていないため、  
一般的には行われません。

#### ②リーチ症候群

遺伝性大腸がんの代表的な病気で、  
患者数は家族性大腸腺腫症よりも多  
く、50歳未満で発症することが多い。一  
人の患者さんが、同時期あるいは異な  
る時期に、2個以上の大腸がんを発症  
することもあります。また、他の臓器に  
発症することもあります。

見た目には一般的な大腸ごとと変わ  
らないため、リーチ症候群による遺伝  
性の大腸がんを診断されないこともあ  
ります。

大腸がんが発症した場合、手術がで  
きる場合には、一般的な大腸ごとと同

じように手術が行われます。手術がで  
きない場合には、抗がん剤治療などが  
行われます。

リーチ症候群の遺伝子を受け継いで  
いる可能性がある人は、20〜30歳代か  
ら、定期的に大腸内視鏡検査や婦人科  
検診を受けることが大切です。

### ☆遺伝性がんの特徴

どのような場合に遺伝性のがんを疑  
うべきか知っておくことが重要です。注  
意すべきポイントは次の3点です。

①家系内に若年でがんになった人がい  
る。父・母、兄弟・姉妹、祖父・祖母、伯叔  
父・伯叔母などの近親者に、50歳未満で  
がんになった人がいる。

②家系内に何回もがんになった人がい  
る。同じがんを何回も発症したり、様々  
ながんになった人がいる。

③家系内に同じがんになった人が多く  
いる。乳がん、大腸がんなど、ある特定  
のがんになった人が何人もいる。

### ☆遺伝子のがんが疑われる場合

近親者の病歴や自分の既往歴から  
考えて、遺伝性のがんが疑われるなら、  
まず専門家に相談することが必要で  
す。最近では、各地のがんセンターや大き  
な総合病院には、「遺伝力カウンセリング  
外来」が設置されており相談すること  
ができます。カウンセリングを受け、必  
要なら「遺伝子検査」を受けておくとい  
いでしょう。これによって遺伝性のがん  
の原因となる遺伝子を受け継いでいる  
か判定できます。